

秋の草

泉鏡花作

大正十三年十月

女郎花を露ながら、浅黄優しき嫁菜の花、藤袴、
また我亦紅一は、今年よく伸び、よく茂り、慌て
た蛙は、蒲の穂と間違へさうに、（我こそ）と咲い
て居る。添へて刈萱の濡れたのは、蓑とも言はず、
秋の雨を其まゝの姿である。中に、千鳥と名のつく
のは、蕭々たる夜半の風に、野山の水に、蟲の聲と
相觸れて、ちり／＼と鳴りさうに思はれる。その千
鳥刈萱。通稱はツリガネニンジンであるが、色も同
じやうな桔梗の花を薄く絞つて、俯向けにつら／＼
と連り咲く紫の風鈴草、或は曙の釣鐘草と呼びた
いやうな草の花。

皆、玉川の白露を鏤めたのを、一其の里に實家
のある、私の近所の方から、毎年のやうに、土産に
して頂戴する。

今年も三日月の頃の初夜すぎて、實家へ出向いた

かへりだと云つて、まだ寝ぬ門を訪れて、框にしつ
とりと置いて、歸んなすつた。

慣れても、新しい風情の中に、その釣鐘草の交つ
たのが、わけて珍らしかつたのである。

畫家、清方さんが、まだ濱町に居た頃である。塵
も置かない綺麗事の庭の小さな池の縁に、手で一寸
劃られるくらゐな土に、蓼の花、露草、蚊帳釣草、
犬ぢやらしなど、雑草なみに扱はるゝのが、田舎の
状を髣髴として、秋の薄日に亂れた中に、釣鐘草が
一莖、高く丈伸びて、たとへば月夜の村芝居に、青
い幟を見るやうに、色も燈れて咲いて居た。遣水の
音がする。萩も芙蓉も、此の住居には頷かれる。植
木屋の手に掛けたり、縁日の鉢植を移したりしたも
のとは思はれない。「あれは何うしたのです。」と
聞くと、お照さんー、鈴木夫人ーが、「春ね、玉
川へ遊びに行きました時、まだ何にも生えて居ない
土を、一かけ持つて來たんですよ。」

すなは 即ち名所の土の傀儡師が、氣を咲かせた面影であ

つた。さら／＼と風に露が散る。また遣水の音がした。

金をかけて、寂茶座敷を營むより、此の思ひつき至つて妙、雅にして而して優である。

其の後、つくし、餅草摘みに、私たち玉川へ行つた時、眞似して、土を、麹一枚ばかりと、折詰を包んだ風呂敷を一度ふるつては見たものゝ、土手にも畦にも河原にも、すく／＼と皆小な穴がある。――釣鐘草の咲く時分に、振袖の蛇體なら可いとして、青だいしやうが、によるによる、などは肝を冷す、と何だか手をつけかねた覚えがある。

「何を振廻はして居るんだい、早く水を入れてお遣り。」

でん／＼太鼓を貰つたやうに、嬉しがつて居る家内のあとへ、縁へ出た。

「根の方をほぐしてからでないと、何ですかね、蝶々が寝て居さうで、いきなり桶へ突込んで可哀相ですからさ。」

フンと苦笑をする處だが、此處は一つ、敢て山のかみのために辯じたい。

秋は、もつと深かつた。――露の凝つた秋草を、霜早き枝のみぢに添へて、家内が麹町の通の花政と言ふのから買つて歸つた事がある。……其時、木の葉とか、あをばとか稱ふる小さな木兎を提げて來た。

手廣い花屋は、近まはりを求めるだけでは間に會はない。房州、相模はもとより、甲州、信州、越後あたりまで、持主から山を何町歩と買ひしめて、片つ端から鎌入れる。朝夕の風、日南の香、雨、露、霜も、一齊に貨物車に積込むのださうである。――今年活けた最初の錦木は、奥州の忍の里、龍膽は熊野平、碓氷の山岨で刈りつゝ下枝を透かした時、晝の半輪の月を裏山の峰にして、ぽかんと留まつたのが、……その木兎で、若い衆が串戯に生捉つた。こんな事はいくらかもある。「洒落に御覽なせえ。」と、花政の爺さんが景物に寄越したのだと言

ふのである。．．．．人柄ひとがらが思おもはれる、お嬢ぢやうさん、
奥おくがた、婦をんなの風采ふうさいによつては、鶯うす、かなりや、せめ
て頬白ほくしろともあるべき處ところを、木兎みうさぎは、．．．．あゝ
人柄ひとがらのほどが思おもはれる。

が、秋あきの日の縁側えんがはに、ふはりと掛かつて、背戸草せとぐさに
浮上うきあがつて、傍かたはらに、そのもみぢの枝えだに、圍粟どんぐりの實みの轉ころ
げたのを見みた時ときは、恰あたかも買かつて來きた一束ひとたばの草くさと、枝えだ
の中なかから、ぽつと飛出とびだしたやうな思おもひがした。

いき餌ゑだと言いふ。．．．．牛肉ぎゅうにくを少々せう／＼買かつて、
さしつけては見みたけれど、恚かう嘴はしを伏ふせ、翼はねをすぼ
め、あはれに悄氣しよげげ、ポーと晝ひるの夢ゆめに魘おびえたやうに
鳴なく。．．．．その眞黄まつきいろ色いろな大おほきな目めからは、玉たまの
やうな涙なみだがぼろ／＼と溢こぼれさうに見みえる。山懷さんふところの稚をさな
い媛ひめの、惡道土あくだうし、邪仙人じゃせんじんの魔法まほうで呪のろはれでもしたや
うで、牛肉ぎゅうにくどころか、よし野龍田のたつたの彩色さいしきの、かはいゝ
干菓子ひくわしでも喙つばみみさうに、しをらしく、痛々いた／＼しい。

．．．．その干菓子ひくわしの袋ふくろを添そへて、駄賃だちんを少々せう／＼、
もとの山やまへ戻もどすやうに、と云いつて、花屋はなやの店みせへ返かへし
たが。

まつたく、木の葉、草の花の精が顯はれたやうであつた。

こゝに於て、蝶の宿をきづかつたのを嘲らない。

「あゝ、ちら／＼。」

と、ほぐす葉を散つて、小さな白いものが飛んだ。
障子をふつと潜りつゝ、きのふけふ蚊帳をとつた搔
卷の、袖に、裾に、ちら／＼と舞つたのは、其は綿
よりも軽い蘆の穂であつた。